

AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第56号

# 空中回廊

コレクション展紹介：「二刀流作家、加藤孝一のテラコッタ作品」

会員のひろば：懇親日帰りツアーレポート、友の会講座、美術館・古民家さんぽ）

収蔵庫から：清水登之《建築現場（ワーガーデン）》

美術館から・活動紹介ほか



清水登之《建築現場（ワーガーデン）》

## 二刀流作家、加藤孝一のテラコッタ作品



晩年の加藤孝一

加藤孝一という名前を聞いて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？お詳しい方であれば「コレクションズ・ラリー展にも出ていた《コーラス》の作者ね」とすぐに分かるかもしれません。ここでは2024年度第1期コレクション展の1室で行う「加藤孝一の複面相」という展示について、簡単にご紹介します。

現在、木村定三コレクションには162点の加藤孝一の作品があります。木村コレクションの作家ごとの点数で数えると、熊谷守一が200点強でダントツ1位ですが、162点という数は尾崎良二と並んで2位です。加えて木村さんの茶会でも度々作品が展示されていたので、まさしくお気に入り作家だったと言ってよいでしょう。

我々愛知県美術館の学芸員からすると加藤孝一はテラコッタの作家という印象が強いのですが、実は彼のキャリアは画家としてスタートしています。しかも瀬戸をベースに二科展で発表して北川民次の薫陶を受けた、「二科会北川組」とでも言うべきハードコアなグループに属していま

した。こうした経歴からすると、1950年代になって突如として始めた焼き物の作品は、どちらかという画家の余技というようにも思えてしまいます。しかし木村さんは加藤孝一の絵には目もくれず焼き物ばかりを集めていました。木村さんらしいと言えばそれまでですが、しかし何故それほどまでに木村さんは加藤孝一のテラコッタに惚れ込んだのかを考えてみたいと思います。



加藤孝一《花子・太郎》1950-60年代か

おそらく加藤のテラコッタ作品に溢れている、童心や遊び心、そしてアマチュア精神が木村さんを捉えたのではないか、というのが私の考えです。というのも、彼の作品は実にシンプルな操作によって出来上がっており、その素朴かつユーモラスな作風が特徴だからです。木村さんの好みと言えはいわゆる「法悦感」や「厳肅感」がよく知られていますが、それ以外にも童心を感じさせるものや、小さくて可愛いものにも強い関心を示しています。そこに見事に合致するのが加藤孝一の作品なのです。一例を挙げましょう。《花子・太郎》は言ってしまうえば粘土の板に切れ込みを入れて、曲げて立たせただけの作品です。平面に切り込みを入れるというのはルーチョ・フォンターナにもありますが、それを立たせて表裏逆の凹凸で男女の顔を作るというのは加藤孝一ならではの作品です。



愛知県美術館（木村定三コレクション）

その一方で木村コレクションの加藤の焼き物には、轆轤（ろくろ）で成型して釉薬をかけた作品もあることから、陶芸の技術も一通り身につけていたようです。実は加藤孝一の母方の祖父は、明治期に瀬戸に石炭窯を広めた加藤新右衛門（1847-1939）で、孝一は小さいころから祖父の家で焼き物に親しんでいました。また、瀬戸窯業高校を卒業していることから、先程述べたアマチュア精神というのも、作家があえて選択したスタイルのように思えてなりません。今回のコレクション展ではこれまであまり紹介されてこなかった作品を中心に、加藤孝一の幅広い作風をご紹介します予定です。

近年、若い世代の画家には絵画と並行して、陶でできた作品を発表する作家も増えてきました。彼／彼女らは粘土の手触りやその可塑性など、油絵具とは全く異なる素材の奥深さに魅了されているよ

うに思われます。ピカソや岡本太郎も陶の作品に夢中になったことを想起しつつ、現在にもつながる「二刀流」の作家として、加藤孝一を捉え直してみたいと考えています。

※コレクション展の内容は急遽変更する場合があります

愛知県美術館主任学芸員

石崎 尚

やっと再開できました！

# 懇親日帰り バスツアーレポート

2023年9月28日(木)  
55名参加



出発前の受付。この光景も久々です

友の会名物、手づくり「懇親日帰りバスツアー」。美術好きみなで、一人で行くより楽しい、自分じゃ行かないところを探して企画しています。今年度の企画展で博物館のおもしろみを知り「ちょっと行ってみよう！」「滋賀ならMIHOミュージアムも行こう！」と久々の開催に踏み切りました。

8:15 栄 出発

## 10:30 滋賀県立琵琶湖博物館

「すべての人々に開かれた、学びと楽しみと、そして未来を考えるための機関」（文化庁ホームページより）である博物館。広くてゆったりしており、琵琶湖にまつわる地形・地質・生態系から人々の営みまでを総合的に魅せてくれる展示を大いに楽しみました。



ミエゾウの頭骨と復元展示

### 会員の声

- ★ゆったりでした。
- ★よく練られた展示でとてもよかったです。
- ★博物館は自分では来なかったが、充実していてまた孫をつれてゆっくり来たい。

## Lunch Lunch



館内レストランで、ピワマスとオオクチバスを使った弁当をいただきました。在来種と外来種を食べ比べ、生物多様性に思いをさせていただく趣向です。

13:30

## 14:30 MIHO MUSEUM

12年ぶりのMIHOミュージアム。前回は東日本大震災直後であり、複雑な思いを抱えて参加された方もいらしたのではないのでしょうか。異空間へと誘うようなトンネルは変わらず、会員を迎えてくれました。



まずは集合写真。お天気も良く美術館に移動するのもお散歩気分でした。

### 会員の声

- ★2回目であったが常設展もよかったです。
- ★よい企画展でとてもよかったです。



ここを抜けると12年ぶりのMIHOミュージアム



企画展「金峯山の遺宝と神仏」も常設展示も充実していました

### 会員の声

- ★中々個人的には行くことのできない場所にある美術館に行かれて良かったです。
- ★非常に楽しく、友達もできました。ありがとうございました。

16:45

19:00 栄 帰着 **おつかれさまでした！**

大きなトラブルなく無事、栄に帰着しました。家路を急ぐ方も、仲良くなった方と再会を約束した方もいらしたようです。

## ◆次年度のこと◆

愛知県美術館友の会は1994（平成6）年10月に発足しました。2024年10月に発足30年を迎えます。そこで次年度は、30年の間にお世話になった方々への「感謝」を軸に活動したいと考えています。バスツアーを含め、色々なところに出かけたりお呼びしたり、といったイベントを多数企画します！お楽しみに！！



# 友の会講座

2023年11月5日(日)

演題

戦後アメリカの抽象絵画

講師

塩津 青夏氏(愛知県美術館 学芸員)

2023年度友の会ご担当の塩津学芸員による講演です。久々の講座に大勢の会員が集まってくださいました。

愛知県美術館に足を運ぶと大抵は観ることができ、会報55号でもご紹介したモーリス・ルイス《デルタ・ミュー》。ここに至るまでのニューヨークにおけるアートシーンを、画家4人(バーネット・ニューマン、ジャクソン・ポロック、ウィレム・デ・クーニング、モーリス・ルイス)の仕事から学びました。特にバーネット・ニューマンの《ワンメント I》(1948年)の描かれかた、作品が「完成した」と決める瞬間について詳しく語っていただいています。



ひとつの作品が他の人の人生に与える影響やその連鎖を考えると、アートというものの力の大きさを感じずにいられません。また今回、会場での何ともいえない親しみのある距離感や空気感に「ああ、コロナ前に戻りつつあるなあ」と感慨深いものがありました。

## 美術館・古民家さんぽ

### 桑山美術館・川原田家住宅

2023年12月3日(日)

それまでの夏日から一気に冬が訪れた師走、「さんぽ」が開催されました。

昭和区の閑静な住宅街にたたずむ桑山美術館には、日本画と茶道具を中心とする所蔵品が展示されています。今回はギャラリーで、茶道具の歴史を軸に展示作品のみどころ解説がありました。初めは座ってお話を聞いていましたが段々、展示スペースに近寄って拝見し、茶道具の奥深さを味わいました。この美術館はお庭も美しく、紅葉と灯籠を楽しんだ方も多かったようです。

午後からは古民家にお邪魔しました。1937(昭和12)年築の川原田家は、和風の建物の中に西洋の要素がミックスされた国登録有形文化財です。はじめに登録の経緯やご苦労、しつらえのレクチャー、その後自由散策。ご夫妻のお話はとても楽しく、居心地よい空間を堪能させていただきました。

桑山美術館にて  
「茶道具にみる不易流行ー桃山から令和ー」展 の解説を聞く会員



桑山美術館の屋上からお庭を眺める

川原田家の入口には友の会歓迎の看板が



# ◆ 愛知県美術館所蔵作品の紹介コーナー ◆

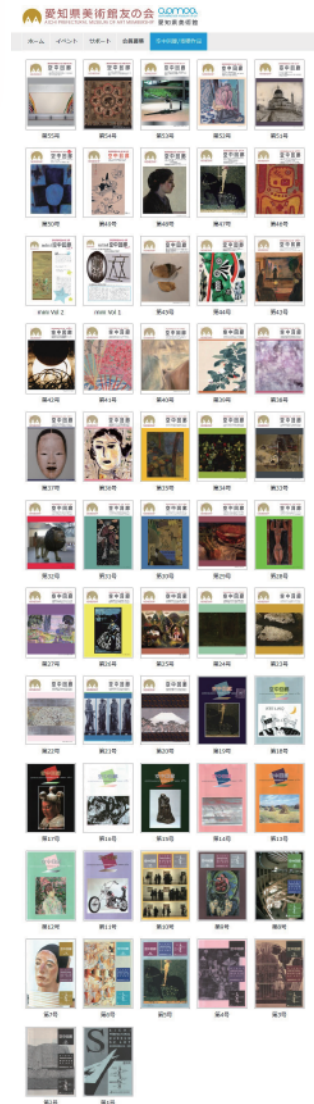
## 「収蔵庫から 深く知るともっと見えてくる」について

友の会会報『空中回廊』の創刊は1995（平成7）年3月です。1994（平成6）年10月の友の会発足と同じ年度に発行されています。当時から友の会の活動報告だけでなく、愛知県美術館の所蔵作品についても、解説や作品にまつわる文章が毎号掲載されていました。

現在のような表紙に作品画像、中面に学芸員執筆の解説を掲載する形式になったのは2005（平成17）年2月発行の20号からです。当時の美術課長（後に愛知県美術館館長）村田真宏氏が、与謝蕪村の2作品について執筆してくださっています。以後約20年、歴代の館長をはじめ27名の方々が読み解いた作品は30点をこえています。

以下に作品名をまとめました。絵画に限らず彫刻、映像作品まで幅広い作品がとりあげられています。展示室でこれらの作品を見かけた際は、是非友の会ホームページの「空中回廊／寄贈作品」バナーをタップしてみてください。

(<https://apmoa-tomo.com/newsletter.html>)



号数	作品名	作者	号数	作品名	作者
20	富嶽列松図、紫陽花に～	与謝蕪村	38	光は荒野の中に拡散している	松本陽子
22	桜図	藤井達吉	39	林檎図	鈴木其一
23	氷塊 I	アンドリュウ・ワイエス	40	帽子の女	国吉康雄
24	太田の森	青木繁	41	扇面流し	藤井達吉
25	夏山	古賀春江	42	フーガの技法	石田尚志
26	夕暮れ	ヴァシリー・カンディンスキー	43	イプセン『幽霊』からの一場面	エドヴァルト・ムンク
27	にぎやかな風景	ピエール・ボナール	44	緑の背景のコンポジション	フェルナン・レジェ
28	カリアティード	アメデオ・モディリアーニ	45	不動明王立像胎内仏画断片	鎌倉・南北朝時代(14世紀)
29	パンと肉	安井曾太郎	46	回心した女の墮落	パウル・クレー
30	メルツ絵画 52、美容	クルト・シュヴィッターズ	47	人生は戦いなり《黄金の騎士》	グスタフ・クリムト
31	鏡	ヴァシリー・カンディンスキー	48	婦人像	太田三郎
32	Animal 2008-01	三沢厚彦	49	六歌仙図	伊藤若冲
33	石庭女人図	島田章三	50	Untitled95-1	辰野登恵子
34	女の館	パウル・クレー	51	ニコライ堂	松本竣介
35	木靴職人	ポール・ゴーギャン	52	裸婦	宮本三郎
36	ノアノアの少女	長谷川利行	53	真っ直ぐな曲線	篠原猛史
37	能面 増女	室町時代(15-16世紀)	54	刺繍種子胎蔵界曼荼羅図	室町時代(15-16世紀)
			55	デルタ・ミュー	モーリス・ルイス

# 収蔵庫から

深く知るともっと見えてくる

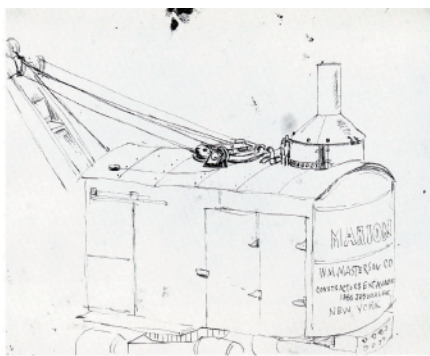
## 清水登之 (1887-1945)

### 《建築現場 (ワーガーデン)》

1923年 油彩 画布 76.0×96.0 cm

栃木県に生まれた清水登之は幼少期から画才に恵まれ、士官学校の受験失敗を機に画家への想いを再燃させます。父に経済的な負担をかけず、また画業に専念するため、1907年20歳でアメリカに渡りました。西海岸地域の鉱山や農園などで労働に従事し、シアトルの画塾を経て東部ニューヨークに出た時には、日本を離れてから10年が経とうとしていました。

当館がこの作品を購入したのは1995年で、それより6年前の1989年10月、ニューヨーク・クリスティーズの近・現代日本美術のオークションで日本人に落札されています。オークション時には“Construction site”と付され、現在も二つの題名が継承されるこの作品には、建築現場付近にいる様々な人物が描写されています。現場監督の男性達、地面の掘削や火おこし、シャベルや旗を持つ人物たちなどからも、工事現場のにぎやかな様子が見てとれます。背後の列車の車両のような構造物は、工事に用いる重機です。街で見かけた重機をスケッチしたとみられ、重機の名称とニューヨークの工事会社名が判読できます。1920年代当時のニューヨークの建築業はユダヤ人などの移民が多くを担い、現場監督の男性の一人や掘削する少年は共にユダヤ人であることを示す伝統的な帽子を被っており、この作品には当時の社会状況が反映されていることがうかがえます。



〈スケッチブックより〉

重機の名称および会社名、その他の書き込み：

「マリオン W.M. マスターソン 掘削請負会社 1388

JESDALEK[不明] ニューヨーク」



自作『ワーガーデン』[写真裏のキャプションから]  
清水登之、長男育夫、妻澄子

もう一つの題名「ワーガーデン(War Garden)」は、第一次世界大戦中の1917年8月、ヨーロッパの同盟国またはアメリカの軍隊が抱える食糧問題を解決するために、裏庭や公園などに「Garden(庭)」を作り、食料を増産することを国民に奨励した施策を指します。清水がニューヨークの日本人画家仲間のガーデンで、「土を掘る」行為そのものをワーガーデンとした記述が1923年4月14日の日記にあり、「いい運動になった」という感想で結んでいます。第一次世界大戦後には、家庭菜園が日常的な行為として浸透していることが推し測られるものです。

1917年12月、ニューヨークのアート・ステューデンツリーグで、清水は初めて画家ジョン・スローンに会いました。清水の1924年4月1日の日記には、スローンが選定した34名の作家の展覧会に、スローン自身が既に持っていた清水のワーガーデンが出品された旨が記述されています。師として仰ぐスローンに作品を所有してもらえたことは喜びでした。この展覧会の時に撮影されたとみられる写真では、息子を絵の中心に据えて家族で記念撮影しています。この翌月5月に清水はパリに発ちました。この作品は、当時のアメリカ社会に取材し、清水の見聞や体験が構成されたものと考えられますが、作品の意図や各登場人物についてはまだ不明な点もあり、これからも調査と解明が必要な作品の一つです。

愛知県美術館主任学芸員 藤島美菜



学芸員の横顔

藤島 美菜

-Fujisima Mina-

愛知県美術館主任学芸員

1998年以降教育プログラムを担当し、同僚と始めた子ども鑑賞会も、今は教員と連携しています。3年ほど前に数えたところ、各プログラムの総実績は60回以上ありました。教員の方々も熱心で、100回もそう遠くないでしょう。毎回参加者と作品の新しい面を発見しています。





AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

美術館から

## MEMBERSHIP

愛知県美術館の企画展は、おおよそ開催される3~4年前から準備が始まり、出品交渉や各種契約など様々な段階を経て開幕を迎えます。2023年度の3年前にさかのぼると、ちょうど新型コロナウイルスの感染が拡大し、社会的に様々な影響や混乱が起こった時期にあたります。つまり本年度の企画展は、まさにコロナ禍の渦中、先の見えない中で企画や準備が始まったもの、ということになります。

本年度の企画展は、「近代日本の視覚開化 明治」展、「幻の愛知県博物館」展、「安井仲治」展、そして「コレクションズ・ラリー」展というラインナップとなり、いずれも日本もしくは愛知の美術や歴史に注目する内容です。つまり、コロナの影響が少ない国内や県内からの作品借用で成立させながらも、それぞれの企画の趣旨や作品の魅力を十二分に伝えられるものでした。正直に言えば、展示室が鑑賞者でいっぱいになって混雑するような(「3密」になるような)、大規模な展覧会の派手さはなかったかもしれませんが、それでも、これらの企画展を通じて、いずれも日本や愛知など私たちの足元に目を向けることで、これまでに紹介できなかった作品の文脈や作家の活動を掘り下げる有意義な機会となったのではないかと考えています。

ところで、愛知県美術館は、館の活動をするうえで重視する4つの視点のうちの1つとして、「国際性と地域性」を挙げています。本年度は、どちらかと言えば国際性よりも地域性を重視し、日本や愛知の独自性を捉えるような企画展を主とした、と言えるかもしれません。しかし2024年度には、企画展などを通じて、国内外の美術館やアーティストとのより国際性豊かなプログラムをご提供できる機会も増えていく予定です。

普段、他の美術館でも、企画展やコレクション展を見る場合には、単に展示作品などの内容を意識しがちかもしれませんが。しかしながら、こうして考えてみると、美術館もまた社会の中の一つの機関であり、様々な外的な要因のなかで成立しているものであることをあらためて認識します。新型コロナだけでなく、複雑で先行きの見えない不透明な時代のなかで、美術館の活動を長期的に継続していくことの重要性和難しさを考えさせられます。

愛知県美術館 学芸員 塩津青夏

### 編集後記

恐る恐る始めた友の会講座の動画配信が定着してきました。活動内容や求められることは時代とともに変わっているのを感じます。会って一緒にできること、会わなくても共有できることを探りながら次の30年を目指したいと考えています。

- 編集 松下智子  
喜田泉/小林克敏/田中寛/富永晃一
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2024年3月

### 友の会入会のご案内

詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は事務局(右記)までお問い合わせください。入会のご案内パンフレットやホームページでも詳しく紹介しております。ぜひご覧ください。

受付場所 ★愛知県美術館 10階受付  
★友の会事務局 ★振込も可

### 定例活動

2023年10月~2024年3月

所蔵品管理 (読み下し)	モニター	発送	受付 <sup>[募集]</sup>	広報	ホームページ	理事会
0回 (7回)	2回	2回	8回	8回	随時更新	4回

### 友の会活動紹介

2023年10月~2024年3月

2023年

10月

- ・特別鑑賞会  
「生誕120年 安井仲治」展  
→ 動画配信(会期中)



会場で解説する鶴尾佳奈学芸員

11月

- ・友の会講座  
愛知県美術館学芸員 塩津青夏氏  
→ 動画配信(2024年1月まで)

- ・企画展鑑賞会 豊田市美術館  
「フランク・ロイド・ライト 世界を結ぶ建築」展

12月

- ・美術館・古民家さんぽ(桑山美術館・川原田家住宅)

2024年

1月

- ・定例活動のみ

2月

- ・特別鑑賞会  
「コレクションズ・ラリー」展 → 動画配信(会期中)

3月

- ・友の会講座  
愛知県美術館学芸員 黒田和士氏

### 友の会事務局から

◇電話対応について

事務局の勤務が不定期となるため、電話での対応ができないことがあります。お問い合わせ、連絡などは、郵便かFAX、Eメールにてお願いいたします。

◇イベントへの申し込み

ホームページからの申し込みも可能になっています。新しい情報は随時更新しますので、ご確認ください。

### 友の会 これからの活動予定

5月 ・特別鑑賞会「コスチュームジュエリー」展

2024年度は友の会発足30周年。「友の会30年の縁~お世話になった方々に逢う~」をテーマにイベントを多数企画します。お楽しみに!

### これからの展覧会のご案内

## コスチュームジュエリー

チャンネル、ディオール、スキャパレッリ 美の革新者たち  
小倉千穂子コレクションより

4.26 (fri) ▶ 6.30 (sun)

### 愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2  
愛知県美術館内(愛知芸術文化センター11階)

✉ [info@apmoa-tomo.com](mailto:info@apmoa-tomo.com)

ホームページへのアクセスはこちらから

愛知県美術館友の会 検索

[apmoa-tomo.com](http://apmoa-tomo.com)

tel. 052-971-5511 (代)

fax. 052-971-5617

(火・木 11:00~15:00)

✉ [@apmoafriends](https://www.instagram.com/apmoafriends)

